州の南なる吹河(チュー)畔のベラサグンであつたが、後にその宗家はカシユガルを都とし、一〇六五年から一一〇二年の間には有名なボグラ汗が出て、彼のクダツク・ビリクといふウイグル語の回教道德書も、此の可汗に捧げられたものである、しかも當時回教文化が一般に如何なる程度に於て此の地方に行はれて居たかについては、殆んど何等知り得る材料無く、ラドロフ博士がクダツク・ビリクの翻譯に於て（第二卷五五四頁）十一世紀に於てはアラビア文字はたゞカシユガルの僅かの住民に通じたものであると斷じたのも、確かなる根據に依つて主張したものでは無かつた、然るに一九一四年に巴里のコレージユ・ド・フランスの教授ウアール氏（Huart）は同年の Journal Asiatique Nov.-Dec. 號に Trois actes notariés arabes de Yarkand と題して、ペリオ氏將來の中亞文書の中、ヤルカンドから出た一〇九六年、即ち前記ボグラ汗在世中の一年に相當する日附けを有する土地賣買文書を解說した、これについて氏の言ふ所に依ると、當時ヤルカンドでは、凡そ不動產の賣買はイスラム教徒の判官の面前に於て爲され、判官は充分にアラビア語に通ずる人であり、證印を押す前に證書のアラビア文をトルコ語に翻譯して關係者に讀み聞かせ、また證人はアラビア字で署名するを常としたが、時には以前より行はれたウイグル字をも用ゐた例もあることが知れるとのことである、即ち當時アラビア文化は宗教を先頭にして漸次ヤルカンド地方にも行はれ、土人はほゞその文字を解し、證書の體裁の如きも、初めに「慈悲寬大なる神の名に於て」なる回教徒の間に定りたる文句を使用して居たものである、但し余輩はかゝる文化がヤルカンド地方の全部を支配したかどうかについては、尙ほ考ふべき餘地があり、恐らくその一部分に止まつたもの、換言すれば回教の信仰がまだ此の地方の全部には行き亘るには至らなかつたらうと思ふが、それにしてもカシユガルのボグラ汗の勢力の下に在つたカシユガル、ヤルカン